

韓国・国立博物館の事例から考える 作品解説の多言語化について

当館学芸部研究員

朴 株顯
パク スレヒョン

奈良国立博物館を含め各地の四カ所の国立博物館は、二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピック開催により来日する多くの外国人来場者に対応するため、既存の日本語、英語以外にも中国語、韓国語の解説を取り入れる事業を二〇一七年七月から本格的に実施し始めた。その事業に関連して、当館の学術交流プログラムを利用して、韓国の博物館における多言語対応の現況を把握するために約一カ月間、韓国に訪問する機会を得た。韓国国内にある九カ所の国立博物館と、八カ所の市立博物館、二カ所の私立博物館を調査してきたので、この場を借りて、韓国の博物館における作品解説の多言語化の現況について報告し、その感想を述べてみたい。

その前に当館の現状を確認すると、平常展に相当するなら仏像館名品展の場合、挨拶文と各章を説明する文章、作品の基本情報（作品名・作者・素材・所蔵者）を日本語・英語・中国語・韓国語の順に四カ国語で表記しており、作品の解説もおおよそ半分以上を四カ国語で表記している。一方、韓国の国立博物館の常設展の場合、挨拶文と各章を説明する文章は日本語と同じく四カ国語で表記しているが、作品の基本情報はハンゲル・漢字・英語の順に表記し、作品の解説はほとんど韓国語のみである。また、韓国の外国語表記の内容は明らかに原文より少なく、原文をそのまま翻訳していないものが多い。このように作品の基本情報と解説を四カ国語で表記している数が多い点と、原文を忠実に翻訳している点からみると、当館の方が、多言語化が進んでいるとも言える。

しかし、解説文の外国語表記を短くしている点に関しては、韓国の国立博物館の場合、翻訳用の原稿を別に用意しており、意図的に短くしているという。すなわち、外国人にあまりにも細かい情報を提供すると、その分難しくなり、作品に集中できないからだという。私も実際にこのような経験があるため、この意見に賛成できる部分がある。

ある。日本人のように日本の歴史の基礎知識がない人の場合、日本人向けに詳しく書かれたものを、翻訳されたもので読んだとしても、その内容が明確に伝わらないことが多く、見慣れない固有名詞などを読むことに必死で、作品の鑑賞に集中できなくなることがある。博物館では「目の前にある本物を見る」という行為も大事なのに、それを邪魔してしまう。とはいえ、作品の情報や解説が全くないと、この作品が一体どのようなものであり、なぜ重要であるのかが分からないため、興味をもたなくなる。つまり、作品解説はその作品の鑑賞に欠かせない情報を入れることが大事で、外国人にとつて重要ではない情報は削ったり、逆に興味をもちそうな情報を入れたりして、翻訳の前に原稿の再構成が必要であると思われる。

このように作品解説に関する問題以外にも当館は、多言語対応の範囲、IT技術の導入、人材の育成など、多言語対応に関する様々な問題点とその解決策を考え、改善していく最中である。二〇二〇年東京オリンピック・パラリンピック開催まで約一年半しか残されていないが、多言語対応事業を通じて、日本の文化を世界に発信する絶好の機会を存分に活用したいと思う。



4月13日(土)から開催する「国宝の殿堂 藤田美術館展—曜変天目茶碗と仏教美術のきらめき」のチラシ。外国人の来場者をよりわかりやすい内容で引きつけるため、中国語と韓国語の表記は日本語のタイトルとは別に考え、「国宝の殿堂 藤田美術館展—宋代の遺産・曜変天目茶碗と日本の仏教美術」としている。